

海原に浮き寝せむ夜は

―瀬戸内海の万葉秀歌

寺尾登志子

一 はじめに

古来、瀬戸内海は人々の往還と多くの物流とを担う海上交通の大切な要衝でした。太平洋の荒波に身をせり出した極東の細長い列島には、朝鮮半島と中国大陸から先進の文物が次々ともたらされ、その大方は東西四〇〇キロにわたる瀬戸内海を東に向けて、畿内へと運ばれていったのです。

七世紀の末に、内陸の奈良盆地で産声をあげたばかりの律令国家では、東アジアの一等国である唐に習って、天武天皇のもと歴史書編纂の機運が高まりました。『古事記』と『日本書紀』の完成をみたのは、八世紀の初頭のことです。

そのどちらの書も、巻頭にイザナキとイザナミによる国生み神話を載せますが、男女神交媾ののち、ともに淡路島を始めに生むところが非常に興味深く思われます。大和朝廷が自分たちの統治する国土を意識した時に、まさきに思い浮かべたのが瀬戸内海最大の淡路島だったということでしょうか。

国の名は「大八島國（オホヤシマグニ）」とも「大日本豊秋津洲（オ

ホヤマトトヨアキツシマ）」とも記され、自分たちの国土が島嶼から成り立つ、という執筆者たちの強い自覚がうかがえます。当時の人々にとつて瀬戸内海は、単なる航海のための要路ではなく、日本という小さな島国の国土誕生にまつわる原初のイメージを湛えていたのです。

そんな思いに確信を得たのは、昨年の歳晚にかねてより訪ねてみたかった瀬戸内海を巡る旅の機会を得たことによります。尾道と今治をつなぐ通称「しまなみ海道」と呼ばれる架橋を通過しながら、朝日に輝く瀬戸内海を車窓に眺めた感動は、今も忘れられません。

大小の島々を浮かべた海原は静かに風いで、朝の光を返すさざ波が銀箔を散らしたように輝く光景は、莊厳とも思える美しさに満ちていました。天地開闢の造化にまみえたといっても、決して大げさとはいえぬ神秘さも感じられ、車中のどこからも、窓外の景観に感嘆の声があがっていました。その時、記紀冒頭の国生み神話の世界が、目の前にすつと立ち上がってきたのです。

記紀と同時代に編集の始まった『万葉集』には「飛ぶ鳥の明日香の里を」とか「あをによし奈良の都は」などのフレーズとともに、明日香や平城京のイメージが強いのですが、万葉歌人の心の原郷としての瀬戸内海を詠んだ歌々を精読しなくては、万葉秀歌を本当に鑑賞したとは言えないでしょう。

今日、瀬戸内海といえど穏やかに風いだ海面と、美しい風光が浮かんできますが、古代における瀬戸内の航海は、激しい潮流の変化

と数多く潜む岩礁に怯えながらの、危険で困難なものでした。

船側や船底の板一枚が生死を隔てる船旅には、拭いがたい不安と恐れが伴い、絶え間ない緊張と疲労感の蓄積したことが容易に思われます。また、陸地に遺す者との別離は強い旅愁となつて、船上の心を鬱屈させたに相違ありません。

そうした旅人のまなざしがとらえた瀬戸内海の風景と、別離が織りなす心のドラマを刻んだ作品を取り上げ、一三〇〇年前の歌びとたちの声に耳を傾けたいと思います。分厚い注釈史を視野に入れながら、一首の向こうの時代背景をも浮き彫りに出来るよう、心掛けながら。

二 斉明天帝の鏡

熟田津にきたつに舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田王ぬかたのおほきみ 卷一・八

高校生の古典の教科書には必ず登場すると言つてもいい、有名な作品です。作者の額田王は娘時代から作歌詠進をもつて斉明天皇のそば近く仕え、やがて斉明の息子である天智、天武両天皇から寵愛を受けた女性歌人として知られます。

この歌は斉明天皇の七年（六六一）正月六日に、前年新羅によつて滅ぼされた百済の復興救援のため、難波津を出港した天皇一行の

軍団が、瀬戸内海を九州筑紫へ向かう途中「熟田津」で詠まれました。「熟田津」は、詳しい特定は出来ませんが、愛媛県松山市の道後温泉近くの港です。

熟田津で船出をしようとする月を待っていると、こうこうと満月ののぼり、潮流も船団の出立に最適となつた。さあ、皆の者よ、今こそ漕ぎ出すがよい！

この歌の左注は、斉明天皇の御製とする説もあることを記していますが、軍団を統帥する老女帝に成り代わつて、その気概を額田王が詠み、一団の士気を鼓舞したものでしょう。

なぜ、船出が夜なのかといえば、瀬戸内海のような多島海では、陸から海に向けて風が吹く夜間の方が、船出には適しているという論考があります。また、月の出と満潮は呼応し、満月と新月には大潮になるといいますから、潮の方向のみならず、潮位の高さも求められたためとも考えられます。

長く同盟関係にあった百済の亡国は、朝鮮半島への足掛かりを失うことであり、百済を滅ぼした唐と新羅が倭国へ攻め寄せる危機感も強く、いわば背水の陣を敷いての出帆だったといえましょう。

斉明天皇に中大兄皇子（天智）大海人皇子（天武）とその妃たちが行く船旅は、政府の機能がそのまま北九州へと移転する意味を持ちました。

『日本書紀』によれば、船団が熟田津に着いたのは一月十四日。難波の港から熟田津まで約一週間、船団ははじめ中国地方の陸路い

を進んだようです。

備中の国大伯の海（岡山県邑久郡の海）の船上では、大田皇女が大天人皇子（天武）の娘を生みました。その地名に因んで、大伯皇女と命名されています。さらに、大田皇女は翌々年には博多の娜大津で皇子を出産し、これも土地に因む大津皇子の名で呼ばれました。母の大田皇女は幼い二人を残して早世し、二つ違いの姉弟はお互いをかばい合うように成長しますが、やがて大津皇子に、叔母である持統女帝から謀叛の嫌疑が掛けられます。

持統は北九州で、姉の大田皇女と同じく大天人皇子の息子を生成っており、その我が子を皇位につけるため、有力な皇位継承者の一人である大津皇子を排斥したのです。

磐余いはれの池のほとりで処刑され二上山に葬られた大津皇子と、最愛の弟を奪われた大伯皇女。二人の悲劇の歌物語は『万葉集』初期の精華ともいえるべき光彩を放っています。姉弟の出自の背景には半島への海外派兵と干渉戦争があつて、二人の境遇に暗い影を投げかけているように思えてなりません。

斉明天皇は北九州に到着してわずか四カ月後に没し、その後中大兄の指揮によって、百濟復興のため、たびたびの救援と派兵を行うにも関わらず、二年後には白村江の海戦で、唐に大敗を喫することになるのです。

『旧唐書』によれば、倭軍の船四百艘はすべて焼かれて炎煙は天を覆い、海水は赤変したとあり、『日本書紀』は唐の軍船百七十艘が

白村江に連なり、左右から官軍を挟んで瞬時にして倭軍をうち破つた、と記します。

「熟田津」の海原は、倭と唐の両軍の流血で染まった白村江へと、続くのですが、一首の調べは清冽で濁りがありません。上の句の「月を待つ」という行為には、人事を尽くして人事を越える何ものかを求める敬虔さを感じられましょう。

「ふな、のり、せむと、つき、まてば」という細かい律動は、大いなる船出に向かう高揚感を表しており、下の句では簡潔にきつぱりと決断を下して、決行を促しています。

何か大きな決断を迫られ不安を抱えながらあれこれ迷い、それでも勇気を奮って今こそ決行しよう、とこうべを上げる時「熟田津」の一首は爽やかに背を押してくれるものと思います。

歴史の悲惨や懊悩を描くのに、短歌という抒情詩は非力であり何の効能も持ちません。けれども、優れた作品であれば、人の心の機微と陰翳を、これほど直截的に動かす文芸も他には無いようです。

さて、備後の海から舵を西南に切って、船団は伊予の海へと向かいます。備後からそのまま山陽道沿いに航路を進むことも出来たはずですが（後述する、七十年ほど時代を下った遣新羅使たちはそのルートを辿っています）、なぜ伊予へと向かったのでしょうか。

伊予の道後温泉には、石湯行宮いはゆのかりみやがありました。『积日本紀』逸文の「伊予国風土記」には、景行、仲哀、舒明、斉明の諸天皇と聖徳太子も伊予の湯を訪れたとあつて、この地が古くから王家との関わり

を持っていたことが偲べれます。

現在、愛媛県松山市の東部の高台にわが国最古の役所跡といわれる「久米官衙遺跡群」の史跡があります。その道後平野有数の規模を誇る遺跡群の中に、一一〇メートル四方の敷地に設けられた最大の建物跡があり、そこが「石湯行宮」ではないかと言われています。

まだ、断定は出来ませんが、考古学の検証と『万葉集』の世界が結びついた興味深い一例です。久米官衙の政庁は、おそくとも七世紀前半には出現していたとされ、古くから伊予の道後平野は王家にとつて重要な地域だったというのも、大いに頷けるのです。

その「石湯行宮」に、二カ月以上にわたつて政府の機能が置かれたこととなります。『日本書紀』を見ると、一団は「熟田津」で七十日ほど逗留し、三月二十五日に博多へ向けて出航しています。滞り期間の長さは、百済復興の救援軍を結成するための徴兵や兵站の準備に費やされた軍備上の必要があった、と想像できますが、また、それは斉明女帝の老身を養うのに要された日数でもありました。

「熟田津」の歌の左注は、斉明天皇がかつて舒明天皇の皇后であった日に、そろつて伊予の湯の宮に御幸したことを記しています。夫亡き後に皇極天皇として即位し、乙巳の変（大化の改新）で譲位するも、斉明天皇として再び即位した女帝の生涯は、激動の時代にそのままオーバーストップしていました。

「斉明紀」は時代の不穏を女帝の失策として幾つも挙げ連ね、七世紀の東アジア情勢に揺れた倭国の困難な状況を伝えています。

その中で、夫と共に訪れた伊予の思い出は、数少ない平穏な輝きに満ちていました。女帝は伊予の行宮で昔日の追憶に浸り「感愛の情」を起こして詠歌、哀傷したと伝えられます。それらの歌々は残念ながら残されていませんが、歌を愛好し、細やかな情愛を持った女帝の、人間的な一面を示すエピソードだったと言えるでしょう。「しまなみ海道」で最も大きい大三島には、古い創建の大山祇神社があります。この島は、瀬戸内海の中でも景勝地として知られる芸予海峡のほぼ中央に位置し、瀬戸内の要衝の地だったそうです。境内は日本最古の楠の原始林が鬱蒼と林立する区域があり、海風にさやぐ葉擦れの音を聞いていると、この神社がつい七十数年前まで、国民総動員の戦勝を祈願する神域であったことも、忘れてしまいうになります。

宝物館には、源義経が奉納したとされる赤絲威鎧大袖付や、護良親王奉納とされる牡丹唐草文兵庫鎖太刀拵など、目も彩な甲冑や武器が展示され、まさしく圧巻の一語に尽きるのですが、女性たちが奉納したとされる鏡も多く陳列されています。その中で、さりげなく「斉明天皇奉納」と記された「禽獸葡萄鏡」を見つけ、思わず目が釘付けになりました。

葉と房を付けた葡萄蔓が同心円をなし、その上に犬のような四つ足の動物と尾の長い鳥があしらわれて浮き彫りにされた精巧なデザインです。おそらく唐で作られ、半島を経由して献上された舶来品でしょう。斉明女帝のかんばせを映したこともあるかもしれませぬ。

楠の巨木の生い茂る神社の国宝館に人影は少なく、円かな白銅鏡は齊明天皇の「熟田津」を照らした月光の明るさを帯び、耳を澄ませば瀬戸内に渦まく潮流の唸りが低く響いてくるようでした。

三 人麻呂の見た光景

瀬戸内を詠んだ柿本人麻呂の秀歌といえ、明石の門すなわち明石海峡を詠んだ歌がすぐ浮かびます。明石海峡は当時の人々にとって、都のある畿内と「鄙」とを分ける明瞭な境目でした。

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

柿本人麻呂 卷三・二五五

齊明天皇一行とは反対に、人麻呂は瀬戸内海を筑紫方面から東進しています。故郷の大和へと心逸らせながら長い船旅を続け、明石の海峡に至って「ようやく故郷大和の陸地が見えることよ」と歌い、安堵と帰郷の喜びを表しているのです。

〈天離る〉は「鄙」の枕詞、「鄙の長道ゆ」は「遠い田舎から」、故郷大和の陸地を「大和島」というあたりに、大小七百の島々から成る瀬戸内海を海路で旅する時の視覚的印象がうかがえます。

島の間を縫うように船を進めて最も大きな淡路島に近づき、その傍らの海峡を通過する時、視界に広がる懐かしい陸地を愛着とともに

に「大和島」と呼んだのでしよう。

声に出して味わえば、「ア段音」の明るさが心地よく響きます。

「あまざか」るひ「な」の「なが」ちゆこひくれ「ばあか」し
のとより「やま」とし「ま」みゆ

船の舳先に立ち、潮風の乱す髪を時折かき上げながら「大和島」を眺望する若き官吏、人麻呂の姿を想像したくなります。何か大きな仕事に取り組み残りあとわずかで完成する、という時の気分でしょうか。そんな大層なことでもなく、ようやく先が見え峠を越えてほっとする一時、この歌とともに、千三百年の時空を飛びこえて人麻呂の息遣いが感じられるのです。

人麻呂は『万葉集』随一の大歌人ですが、その身分は低く六位以下といわれ、下級官人として、近江、石見、筑紫へと下向しました。その身分を卑下することはなく、天武、持統朝で着々と構築されてゆく律令体制の一躍を担う役人として、誇りを持って働いていたようです。

荒たへの藤江の浦にすぎ釣る海人とか見らむ旅ゆくわれを

卷三・二五二

〈荒たへの〉は「藤」にかかる枕詞、「藤江の浦」は明石市の播磨灘に面する海岸を言います。「荒たへの」藤江の浦で鱸を釣る地元漁師などに見えるだろうか、官人としての任務で旅するこの私を「

と歌う人麻呂、長旅にやつれた身なりを若干気にしていたのかもし
れませぬ。「荒たへ」はもともと粗末な織物の意で、「藤」の蔓の織
維で作った衣服を藤衣といいますが、初句、二句は「海人」の貧
相な着衣を連想させており、そこに自分のみずばらしい身なりを意
識しながら、下の句の叙述へと繋がっています。

「旅ゆくわれ」には、その旅が官命を帯びた出張であることを自
負する思いが読み取れます。持統朝で歌人として脚光を浴び、いわ
ば時代の寵児だった人麻呂ですが、職務にもそこそこの勤勉な伊達者
官吏だったらしい、そんな一面がうかがえる一首です。

人麻呂が、讃岐の狭岑島の磯辺に死人を発見して詠んだ挽歌があ
ります。『万葉集』は、海浜で亡くなった死者を悼む長歌と反歌を卷
十三に九首並べますが、その先蹤になったと思える作品です。

讃岐の狭岑の島にして、石の中の死人を

見て柿本朝臣人麻呂の作る歌一首 併せて短歌

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神から
か ことだ貴き 天地 日月と共に 足り行かむ 神の御面
と 継ぎ来る 中の湊ゆ 舟浮けて 我が漕ぎ来れば 時つ
風 雲居に吹くに 沖見れば とみ波立ち 辺見れば 白波
さわく いさなとり 海を恐み 行く舟の 楫引き折りて
をちこちの 島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に

廬りて見れば 波の音の しげき浜辺を してきたへの 枕に
なして 荒床に ころ伏す君が 家知らば 行きても告げむ
妻知らば 来も問はましを 玉梓の 道だに知らず おほほ
しく 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは

反歌二首

卷二・二二〇

妻もあらば摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけ
らずや 同・二二二

沖つ波来寄る荒磯をしきたへの枕とまきて寝せる君かも

同・二二二

長歌は、人麻呂を乗せた船が突風と荒波に襲われ、狭岑の島（現
在の沙弥島）に漕ぎ寄せ避難した所で死人を発見したことを歌って
います。全体を三段に分けて読んでみましょう。冒頭から三行目の
「我が漕ぎ来れば」までが一段落、「時つ風」から「廬りて見れば」
までを二段落としてみます。（訳文中の「へ」は枕詞）

一段落では、自分が旅をしている土地の神を褒めて挨拶するとこ
ろから始まります。「玉藻よし」讃岐の国は、国柄が立派ゆえ見て
も見飽きず、国つ神の御心でこんなにも貴いです」こう述べて、土
地の神の機嫌を損ねないようにします。

そして、「天地と日月と共に、満ち足り栄えるであろうその神の御

顔として、神代より続いてきた中(那珂)の湊から船を浮かべて我々が漕ぎ出してみると」と続きます。

「神の御顔」は『古事記』にいう讃岐の国の神、飯依比古の尊顔を引き合いにした国讃めの言葉で、「那珂の湊」は現在の香川県丸亀市の金倉川河口付近にあった船着き場をいいます。

二段落は、那珂を出港すると「潮時に吹く突風が上空に吹きわたる、沖を見ると盛り上がる波が立ち、岸边には白波がざわついている、(いさなとり)海の恐ろしさに、ゆく船の楫も折れんばかりに漕ぎ続け、」と荒天の恐怖を歌っています。

さらに、「あちこちに島は多いけれど、その名も高い狭岑の島の荒磯に仮小屋を作って見ると」と続けますが、この部分でも、避難した島への国讃めを忘れません。

那珂の港から狭岑の島まで東北約八キロ、人麻呂本人が命の危機にさらされながら上陸して見た光景が、最後の段落で述べられます。それは、「波音のとどろきやまない浜辺をへしきたへの枕として、荒々しい岩床に一人横たわっている人」の姿でした。誰とも知れぬ行路死人に対して、人麻呂は語りかけます。

「家を知っていれば、言つて家族に告げるものを、妻が知つたら来もするだろうに、ここへ来る(玉梓の)道さえ知らず、心細く心配しながら、帰りを待ち焦がれていることだろう、あなたの愛しい妻は」。

この長歌は、家や妻から引き離され、波浪打ち寄せる岩場で骸と

なつた者の荒ぶる魂を鎮めるために必要とされた挽歌です。この時代、旅の途上で行路死人に出会った時には、死者の魂を鎮め自分たちの行路の無事を祈念する風習がありました。

嵐が去つた後、狭岑島では行き倒れの死者が弔われたことでしょう。その折、この長歌が朗詠されたのではないかと思われます。帰京後も宮廷で披露され、今でいうドキュメント作品として宮人たちに鑑賞されたのではないのでしょうか。

長歌の内容を強め、余韻を深める反歌二首も読んでおきましょう。一首目の「うはぎ」は嫁菜のこと、秋に可憐な薄紫の花を咲かせるノギクの一種で、春先の若葉を食用にします。

「もしここに妻がいれば、一緒に摘んで食べることも出来ただろうに、狭岑の山野の嫁菜は食べ時を逸して堅く伸びてしまったではないか」。

これは、人麻呂が死者に感情移入し成り代わって詠むことで、その無念を慰撫しているのでしょう。春先の若葉を睦まじく二人で摘んで食べる、そんな健やかな夫婦の楽しみが、永遠に奪われてしまったやるせなさが伝わってきます。

二首目の反歌は長歌と前歌を受け、全体を締める部分です。「寝す」は「寝^ぬ」の敬語動詞で、「君」とともに死者を敬っています。

「沖の波のしきりに寄せ来る荒磯を、へしきたへの枕として横たわっていらっしやる貴方よ」。

荒ぶる死者の魂を悼む心には、いつ自分自身が悼まれる側の立場

になるかわからない不安と懼れがありました。人麻呂は多くの挽歌を書きましたが、漂着した狭岑島で見た死者の光景から、自分自身の死をごく身近に感じ、表現者としてまざまざと幻視したように思えます。

狭岑島と記された現在の沙弥島は、香川県坂出市の周囲ニキロほどの小島です。近年、坂出との間が埋め立てられて地続きになっており、全体が瀬戸大橋記念公園の半島部分となっていて、その先端の海辺に、人麻呂の長歌を刻んだ歌碑が建っています。

四 鞆の浦の亡妻挽歌

神亀四年（七二七）暮れ、中納言大伴旅人は大宰帥を兼務して遠みかじの朝廷、すなわち北九州の大宰府へ下向したといわれます。斉明天皇一団が北九州へと瀬戸内海を西行してからおよそ七十年近くが経過とする頃、大伴旅人は筑紫で晩年の三年間を過ごしました。

大宰府の長官という職務は重要な職責でしたが、聖武天皇即位の後、政敵藤原氏の台頭著しい中央政界から遠く離れることは、一族の長としてきわめて不利だったと言えましょう。

加えて、この時旅人は六十三歳。当時としては紛れもなく高齢者の部類です。奈良の都を離れる苦痛と、身体への不安を抱えながらの赴任となりました。長年連れ添った妻の大伴郎女と、嫡子家持を伴ったのも、そうした気持の反映だったと思えます。

旅人の歌は、ほとんどが筑紫滞在中のもので、すでに筑前守として赴任していた山上憶良とともに、中国の文芸を存分に撰取した、豊潤で創作意識の高い作歌活動を行いました。と同時に、たとえば、巻三のいわゆる酒讚歌一連など、分かりやすく現世を肯定する歌も残しています。

験しるしなきものを思はずは一坏ひしつぎの濁れる酒を飲むべくあるらし

巻三・三三八

生ける者つひにも死ぬるものになればこの世なる間は楽しくを

あらな

同・三四九

また、大陸から伝来したばかりの梅の木を愛で、自ら梅花の宴を催したことも知られています。酒に酔い、梅花を歌い、そこには身分を越えた座の文芸が現出しました。次は、その折の旅人の一首で、王朝和歌を先取りするような美意識が見られます。

わが園に梅の花散るひさかたの天あめより雪の流れ来るかも

巻五・八二二

こうした歌々からは、文人貴族の雅な生活の一端が偲ばれますが、その心中には、拭いがたい悲嘆と鬱屈の情が溢れているのです。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

卷五・七九三

酒讃歌にあつた享樂主義を反転させたような歌で、人生の空虚と悲しみを直情的に訴えかけてきます。この世は空しいものだ、と教えるのは仏教の經典でしょうか。そう知れば知るだけ、心は悲しみで一杯になると言っています。認識と煩惱の乖離をつぶさに見つめた、重い内容の一首です。

この歌のきつかけとなつた悲しみの一つに、大宰府に着任早々、同行した妻が病に倒れ、先立たれた事実がありました。神龜五年（七二八）晩春から初夏にかけての死別で、次は妻の死後、数十日を経て作られた挽歌です。

愛しき人のまきてしきたへの我が手枕をまく人あらめや

卷三・四三八

「いとしい妻が枕にして寝た、私の（しきたへの）手枕を、妻の他の誰が枕とするだろう。誰もいるはずがない。」妻を亡くした喪失感を、自分の手枕に抱かれた妻の面影を浮かべることで表しています。結句の反語表現は、他の誰も妻の代わりにはならない、と嘯みしめているのです。

共寝の記憶を、「手枕」のみをクローズアップして歌つたこの一首、

腕の中で安らぐ妻の体温と重さと、かすかな髪の毛の匂いさえ感じさせるように、旅人の感性の若々しさを伝えています。

妻が死んで二年半の後、旅人は待望の大納言に昇進し、帰京の途につくこととなりました。望郷の思いはようやく叶えられるのですが、帰京の日が近づくにつれ、共に帰るはずの伴侶を失つた悲しみと帰京後の不安が激しく胸に迫るのでした。

天平二年（七三〇）十二月、大納言大伴旅人卿は帰京の途上、風待ち、潮待ちの港として知られる瀬戸内の鞆の浦に立ち寄ります。

長年連れ添つた妻が健在であつた往路、それはわずか三年ほど前のことでしたが、夫婦は手を携えて鞆の浦の風光を愛でたのでした。旅人はともかく大伴郎女にとっては、旅そのものが新鮮で珍しかったことでしょう。

時代が下つて十八世紀、鞆の浦の景色は朝鮮通信使によつて「日東第一形勝」と褒め称えられますが、大自然の織り成す造化の妙は千年前も同じで、旅人夫妻を楽しませたに相違ありません。けれども、楽しかった旅の回想は、亡き妻への追慕の情と重なりました。

吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき

卷三・四四六

鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘れぬやも

同・四四七

磯の上に根延ねばふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか
同・四四八

この三首は、「鞆のむろの木」をめぐって死別の悲しみと喪失感を見つめた連作です。一首目の、妻を愛おしむ「吾妹子」の一語には「可愛いあの娘こ」というようなニュアンスがあつて、可憐な女性のイメージが浮かんできます。

「いとしい妻が見た鞆の浦のむろの木は変わらずあるのに、見た人はもういないのだ。」と、悠久の自然に対し、はかない人間の命を歌います。

当時、鞆の浦には瀬戸内に多く自生するネズの巨木があつたとされ、ヒノキ科常緑樹のネズの木を「むろの木」と呼ぶのですが、万葉仮名では「天木香樹」とも表記します。四句に「常世の国」が連想されることも合わせて、「鞆のむろの木」は神木として崇められていたように思えます。健康長寿を祈願する対象だつた巨木かもしれませぬ。

二首目では、「これから、鞆の浦のむろの木を見ることがあれば、一緒に見た彼女が必ず思い出され、忘れられないだろうよ」と妻亡き後の人生を憂えています。輝かしい二人の旅の形見であつた「鞆のむろの木」は、妻の死のよすがともなりました。

そして三首目、「磯の岩に根を張つたむろの木に、妻はどこにいるのかを問えば、教えてくれるだろうか」とは、せんない繰り言に似

た自問自答といえますが、記紀のイザナキや、遠くギリシア神話のオルフェウスの悲嘆とも響き合う味わいです。

これら旅人の亡妻挽歌によつて、「鞆の浦」は『万葉集』の名高い歌枕となりましたが、この時代すでに山陽道は開通しており、旅人が海路を辿つたかどうかは疑問の余地が残ります。

大納言の身分ともなれば、駅馬えきばの通る山陽道の陸路を辿り、任地への往還に、その土地の旧所名跡を廻つたとも考えられます。作者は不詳ですが、『万葉集』巻七「羈旅」の部に、実際「鞆の浦」を海路で通つた者の歌が二首あるので、取り上げておきましょう。

海人小舟帆あまをぶねかも張れると見るまでに鞆の浦廻うらみに波立てり見ゆ

巻七・一一八二

ま幸さいくてまたかへり見むますらを手に巻き持てる鞆の浦廻を
同・一一八三

一首目、「海人舟が帆を張つたかと思えるほど、鞆の浦辺に波が立っているのが見える」という叙景歌です。まっ白な高波を漁師の舟の帆に喩えたところに、実際に航路をゆく者の、潮待ち、風待ちの実感が込められています。

二首目は、「無事に帰つてまた見よう。ますらおが手に巻いて持つ鞆と同じ名を持つ、この鞆の浦あたりを」と歌い、「鞆」を掛詞として用いました。古代にあつて、歌の技法とは、単なる言葉遊びでは

ありません。根底には言葉が存分にその靈力を發揮するよう頼む言靈信仰があり、無事帰還の願いを強く込めた結果なのでした。

亡き妻をしのぶ旅路の歌ごころ恋は〈孤悲〉なり万葉仮名に

寺尾登志子

五 遣新羅使たちの瀬戸内海

大納言に昇進した大伴旅人は帰京の翌年、薨去しました。その五年後、天平八年（七三六）に、安倍朝臣継麻呂を大使とする遣新羅使一行約八十名が、難波津から瀬戸内海を通って太宰府へ、そして新羅へと出航しています。

白村江の大敗以後、両国間では表面上の友好関係を装いながら善隣外交が行われていましたが、緊張関係は常に持続していました。

この時も国家間に早急の緊張緩和を要し、九州全土に広がる疫病禍を押しての任務でした。

一行は翌年、予定より数カ月遅れて帰京しますが、大使継麻呂は対馬で没し、副使の大伴三中も染病して、二カ月対馬に足止めさせられます。渡海の危険に加えて伝染病（天然痘か）にも苦しめられた、苛酷な派遣となりました。

『万葉集』巻十五は、その時の遣新羅使節団の残した百四十五首を載せています。その歌群は一行が機会に応じて詠んだ嘯目詠を中

核としながら、船上や寄港地で朗誦したと思われる古歌や、途上で亡くなった者の挽歌なども含みつつ、全体を「旅による別離の悲しみ」を主題として再構成し、演出の手を加えた「歌物語性」を強く感じさせます。

作者は、大使、副使、大判官、小判官などと記される他、停泊地の遊行夫婦の名などもありますが、多くは無名歌です。その中には、歌群を連作として構成した人物が、後日添えた作も含まれるといわれ、それはほぼ大伴家持だろうと推定されています。

ここでは歌群の中から瀬戸内に関わる秀歌を抄出し、家持との関わりも視野に入れながら、鑑賞してゆきましょう。

海原に浮き寝せむ夜は沖つ風いたくなく吹きそ妹もあらなくに

巻十五・三五九二

右は無記名歌で、船が難波津を発つ時に読まれた、と左注が付いています。「海原の船上で浮き寝をしなくてはならない夜には、沖の風よ、ひどくは吹かないでくれ。可愛いあの娘はそばにいないのだから」と歌っています。

「海原に浮き寝せむ夜は」が印象的で韻律もよく、場面設定そのものから船旅の心細さが伝わる冴えたフレーズです。「沖つ風」に「吹くな」と禁止する理由を、一人ではとても耐えられないから、と歌う心は、若々しい抒情に溢れており、どことなく昭和歌謡の一節が

浮かんできそうです。

次はいよいよ船に乗り、瀬戸内海を西に進んで「武庫の浦」や「玉の浦」「神島」などよく知られた海浜の地が歌われ「鞆の浦」に至ります。ここでは、六年前に大伴旅人が亡き妻を偲んで詠んだ「むろの木」が、二首歌われました。

離磯はなれそに立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも

同・三六〇〇

しましくもひとりありうるものにあれや島のむろの木離れてあ
るらむ

同・三六〇一

一首目の「離磯」は、次の歌に「島のむろの木」とあるように、離れ島の荒磯を示しますが、眺望の良い対潮楼福善寺の向かいにある仙酔島とする注釈があります。三句の「うたがたも」は「きつと、確かに」と訳され、下の句は「長い年月を過ぎてきたのだなあ」と「むろの木」の樹齢を思いつつ、「けるかも」と詠嘆しています。次の初句は「しばらくでも、少しの間でも」の意で、一首は「少しの間だって、人は一人で生きられるものなのか。あの離れ島のむろの木は、どうして一本だけで離れて立っていられるのか」と疑問の形で木の姿を強調するのです。

前歌を受けた感慨で、巨木の風姿が示す悠久の時間に対し、ほんのわずかな寿命しか持たない人間なのに、自分は少しの間も一人で

は生きられぬと内省する態度からは、個を見つめた近代的憂愁さえ感じ取れる気がします。

出航前の「海原に浮き寝せむ夜は」の歌と、右に挙げた「むろの木」の二首は無記名歌で、歌群を編集したとされる大伴家持によって編集時に添えられたと見ることも、あながち見当はずれではないように思えます。

父旅人と共に大宰府から帰京する時、家持は十三歳の少年でした。おそらくは父と同じく陸路を辿り、瀬戸内の船旅は体験しなかつたはずですが、折々に立ち寄った浦々の印象は、感受性豊かな文学少年の脳裏に、深く焼き付いたのではないのでしょうか。

少年期に刻まれた瀬戸内の印象を、遣新羅使たちの歌群に投影させ、自らその一員に成り切って何首かを創作し、そこに挿入したと想像してみるのも、鑑賞の妨げにはならないと思うのです。

父が亡き妻のよすがと眺めた「鞆のむろの木」に、息子は己の孤独を重ねて見ていたのかも知れません。亡き妻に哀切な挽歌を書いた父ももはや帰泉し、その声を聞く術は無いのですから。

次に挙げる三首は、題詞に「長門の浦より船出する夜に月の光を仰ぎ観て作る」とあります。「長門の浦」は、広島県安芸郡の倉橋島南岸の「桂が浜」と言われており、作者は記されていません。夜の船出の連作で、いずれもしつとりと哀愁をまとった旅情を伝えています。

月詠つよみの光を清み夕なぎに水手かこの声呼び浦廻うらみ漕ぐかも

同・三六二二

山の端に月傾けば漁いざりする海人の燈火ともしび沖になづさふ

同・三六二三

我のみや夜舟は漕ぐと思へれば沖辺の方に楫かぢの音すなり

同・三六二四

夜の海の具体的な囑目には、実際に体験しなければ歌えない実感があるように思います。身分の低い作者の歌は録事によつて記録され、帰国後に家持の手元へ伝わったのではないのでしょうか。

一首目の「月詠」は月を擬人化した言い方で「水手」は水夫の古語、「呼ぶ」は大勢で声を掛け合うことを言います。二首目の「なづさふ」は水に漂うことですが、ここでは燈火が沖にちらつき、海面に映る景を表します。連作として読むべき三首なので、訳を続けて記すことにします。

「月の光が冴え冴えと清らかなので、夕風に水夫たちの声が互いに呼び掛け合つて浦のあたりを漕いでゆくよ。島の山の端に月が傾き、夜が更けてくると、漁師たちの漁り火が、沖合いでちらちらと瞬いている。自分だけが、夜の出航をするのかと思っていたが、沖の方から、漁船の楫の音が聞こえてくる。」

潮の流れを待つ出航前の張りつめた時の推移を、聴覚と視覚を交えて静かに歌つたところに妙味があります。「水手」や「海人」など、

海で働く者への人恋しさも感じられ、表情豊かな叙景歌になりました。

この後、使人一行は関門海峡に近い周防灘の佐波島近辺で逆風に襲われます。海上に一夜を漂い、翌日大分県の分間の浜に漂着しました。その地で、恐ろしく苦しかった一夜を思い出して詠んだ歌が八首載せられています。そこから、三首を読んでみましょう。

大君みことかしの命 畏み大舟の行きのまにまに宿りするかも

同・三六四四

吾妹子は早も来ぬかと待つらむを沖にや住まむ家づかずして

同・三六四五

海原の沖辺に燈し漁いざる火は明かして燈せ大和島見む

同・三六四八

一首目の作者は、雪宅麻呂ゆきのやかまろとあります。上二句は奈良時代になつて用いられた常套句で、「天皇の命による公務」であることを言い、「大君の命令を恐れ畏んで、大船の漂うままに、我々は旅の宿りをするこよ」と歌っています。

大君の勅令は拒否できない宿命として、官吏たちの前に立ちはだかりますが、「大君」と「大舟」を対峙する歌の構造は、その勅令に背い切れない気分を微かに暗示するよう注目されます。

作者の雪宅麻呂はこの後、往路の杵岐島で「鬼病に遇ひて」死去

しており、彼の死を悼んだ長歌三首（反歌含む）が同僚たちによって作られました。

二首目は、艱難辛苦を乗り越えた安堵感から、残してきた家族へと思いを馳せています。

「いとしい妻は私が早く帰って来ないかとまっているだろうに。いつまで沖の海上に逗留することか、家に近づきもしないで」と洩らす嘆息から、まだまだ続く困難な船路を思う気持が偲べれます。

三首目は沖の漁り火に向けて、「もつともつと明るく灯せ」と呼びかけ、故郷の「大和島を見たいから」と、もはや見えない故郷の陸地を恋い、望郷の思いを切に吐露するのです。

この歌について、近代を代表する歌人の窪田空穂と土屋文明が、正反対の評価をしているのが注目されます。空穂は『万葉集評釈』で「不自然さを自然に感じさせる主力は調べにある。柔らかくはあがるが澄んでいるので一首の強さが添い、人を引き行くものとなっている」と好感度を高く記し、かたや文明は『万葉集私注』で、下の句を「詩的強調」として「返ってわざとらしい誇張になった」と取り付く島がありません。

もとより私は窪田空穂の鑑賞に同感しますが、文明の素っ気なさについてひと言弁明を加えれば、「生活即短歌」を標榜し、戦後の短歌を民衆詩として立て直した土屋文明にとって、短歌における「詩的誇張」は安易に近づいてはならない禁じ手だったのです。

平成生まれの若い歌人たちの短歌は、そのタブーを自在に使いこな

すところから生まれており、「明かして燈せ大和島見む」という下の句は、現代短歌とそう遠くない距離にあるのかもしれませんが。

六 結びに代えて

瀬戸内海に関わる『万葉集』の秀歌は他にもたくさんあり、それらのほんの一部しか抄出出来なかったのが心残りです。和歌はヤマト歌と呼ばれた『万葉集』の時代から、王朝和歌を経て中世の釈教歌を吸収しながら、連歌、連句、俳諧を派生させ、明治の改革運動を経て今日の短歌に至っています。

千三百年という文芸史において、短歌という伝統的定型詩は行き詰まりを見せるたびに、『万葉集』へと帰ってゆきました。日本の近代化の過程で、偏狭な国家主義に持ち上げられた不幸な時代もありましたが、『万葉集』が持つ人間臭い魅力を、少しでも多くの読者と分かち合えたら、と願ってやみません。

昨年十二月末、人文研の瀬戸内研究旅行に参加して、あらためて『万葉集』の魅力を確認することが出来ました。ご尽力頂いた皆様に、心より感謝申し上げます。

波まくら仮りの宿りの一夜ゆゑ語り明かさむ歌のあとさき

寺尾登志子

参考文献

- ・伊藤博(二〇〇五)『萬葉集釋注』一〜十 集英社文庫ヘリテージシリーズ
- ・小島憲之・木下正俊・佐竹昭広校注(二九七五)『萬葉集』1〜4 小学館日本古典文学全集
- ・佐竹昭広・山田英雄・工藤力雄・大谷雅夫・山崎福之校注(二〇一三)『万葉集』一〜五 岩波文庫
- ・桜井満訳注(一九七四)『万葉集』上〜下 旺文社文庫
- ・坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注(一九九五)『日本書紀』(一)〜(五) 岩波文庫
- ・土屋文明(一九七七)『萬葉集私注』八 筑摩書房
- ・北山茂夫(二九八四)『萬葉集とその世紀』上・中・下 新潮社
- ・鐘江宏之(二〇〇八)『律令国家と万葉びと』小学館
- ・中嶋真也(二〇一二)『大伴旅人』笠間書院
- ・橋本雄一(二〇一二)『久米官衙遺跡群』新泉社
- ・中村修也(二〇一五)『天智朝と東アジア』NHK出版
- ・荒木敏夫(二〇〇六)『日本の女性天皇』小学館文庫
- ・石村智(二〇一七)『よみがえる古代の港』吉川弘文館
- ・平田喜信・身崎壽(一九九四)『和歌植物表現辞典』東京堂出版
- ・福山市輓の浦歴史民俗資料館友の会(二〇一六)『輓の浦の自然と歴史』福山市輓の浦歴史民俗資料館活動推進協議会